

## 八重山の封建社会における民衆と民謡

はじめに

大 泊 博 己

民謡の起源においては、人々が即興として歌いだすことが即、歌として存在するわけではない。人々の思いが調べや曲となり伝統的芸術、文化として存在するには数多くの人達の無償の行為と精神的苦悩が投入されているのである。

また民謡は、それに長い歴史過程における人々の精神がこめられているからこそ、力強くかつ根深い心の歌として存在しうるものだと思う。従って、民謡を愛することは非常に責任を負うことになる。なぜなら、民謡は歴史の産物であり、歴史を通して、その当時の人々のエトスをどのように理解するかに関連するからである。私達が民謡に関わる時、単なるノスタルジアからでなく、抽象的な心情からでなく、民謡にこめられた民衆像を理解していくことが基本的な態度だと思う。それには、民謡がどのような歴史的背景、社会背景の中で生まれたかを認識することが重要であると思う。

### 一、八重山群島の地理概観

九州と台湾の中間海域に大小さまざまな形をした島々が数珠をつなぎあわせたように点在している。これらの島々は、明治の頃まで薩摩の南の海域に浮ぶ島々という意味で薩南諸島と呼ばれていたが、現在は南西諸島と総

称されている。

現在鹿児島県の行政区域に属するのは吐噶列島トカラと奄美諸島であり、沖縄県の行政区域に属するのは、いわゆる琉球列島で、後者はさらに、沖縄群島、宮古群島、八重山群島から成っている。とくに宮古群島、八重山群島を先島と呼んでいる。これは、薩南諸島のいちばん果ての島という意味であると思われる。八重山群島（以下群島を省略）は名実ともに現在、日本領土の最南、最西南端の地である。波照間島は、その最南端であり、与那国島は最西南端である。

八重山は、大小十余の島から成り、現在人の居住する島は九島である。

四方海洋に囲まれた八重山は、年平均気温が二三、六度で一年中の気温の変化は少なく、亜熱帯海洋性気候と呼ばれ、冬期も割り合い温暖で、夏期もまた海風によって炎暑が和らげられている。温帯地方のように四季の移り変わりが明瞭でないが、五月から九月中旬までは南の季節風で暖候期、九月下旬から四月までは北寄りの季節風で寒候期と大別される。

五・六月は雨期で、日本本土の梅雨期に相当する。年によっては、空梅雨になることもあり、このような年は地下水が不足して干ばつの害が大きくなる。七・八・九月は酷暑と台風時期で、連日最高気温が三〇度以上の暑さが続く。この時期に台風が少ないと干ばつとなり、台風と干ばつは住民の生活を不安なものにしている。

## 二、八重山の歴史概観

### (一) 琉球服属

西暦一二六四年、英祖王統注(1)に始めて、久米島・慶良間・伊平屋の諸島が中山王国に入貢し、続いて一二六

六年、大島諸島が入貢、宮古・八重山群島の場合は、これら諸島の入貢服属に遅れること百二十余年後の一三九



○年、察度王統<sup>注(2)</sup>の四十一年のことである。当時沖縄本島は、北山王国、南山王国、中山王国に分れて相争っていたが、その中でも中山（以下王国省略）が最も勢力を示していたといわれる。沖縄本島周辺の各離島は、それぞれ三山の何れかに関係があったといわれ、遠隔の地、宮古・八重山は久米島を通じて交易も便利であった中山に入貢服属したといわれる。宮古・八重山の中山服属は、現在から数えて六四〇年前のことである。八重山が中山に入貢した頃、八重山は、酋長（按司）Ⅱ島主という政治的支配者の未だ出現しない平和な祭政一致の時代であり、神を祀る司祭者が神意を受けて、政治的問題をもとりしきっていたものと思われる。入貢という政治的問題もそのようにして処理されたのであろう。中山に入貢服属するまでの八重山は、司祭を中心とした原始共同体的社会であったと思われる。

## (二) オヤケ赤蜂の反乱

十五世紀中頃から十六世紀初にかけて八重山でも島々を支配する按司（酋長）が出現する、いわゆる群雄争乱の時代となる。

その頃、沖縄本島では、すでに九・十世紀に出現した按司の中から三山統一に成功した尚真王により着々と中央集権化が進んでいたのである。このことから八重山の歴史発展の後進性がうかがえる。

八重山が琉球王国の完全な支配下におかれるのは、オヤケ赤蜂の首里王府に対する反乱を契機としてである。オヤケ赤蜂が反乱を起こした原因には、今日二つの説が論争となっている。一つは貢租滞納の問題であり、<sup>注(3)</sup>もう一つは信仰問題である。<sup>注(4)</sup>前者は首里王府に対して謀反を致し洪武年間以来の入貢を絶ったと云うものであり、後者は八重山固有の文化・宗教を邪道として抑える首里王府に対して自らの宗教、文化の維持を求めたものである。

この二説のどれが正論であるか断言できないと思うが、私は後者のほうがあてはまるのではないかと思う。な

ぜなら、前者を認めるとしても反乱を起してまで貢を絶とうとするには、貢滞納以上の原因がある筈だからである。それは八重山固有の生活文化への首里王府による圧迫圧制であり、反乱はそれに対するものであろう。

### (三) 薩摩の琉球侵入と八重山

薩摩藩の島津氏は、慶長十四年（一六〇九）に琉球に侵入し支配下においたのである。

当時、琉球はすでに全島が統一され、琉球王国という国家体制をなしていた。しかし琉球王国は、薩摩の植民地的支配政策と対中国進貢のために大きく変貌していったのである。薩摩の支配下におかれた琉球王府の財政は非常に苦しい状態であったと思われる。それで琉球王府は、その支配下にあった八重山に目をつけ、琉球王国の絶対的権力をもって先島住民を圧迫し、搾取するようになったのである。

そして先島住民のみを対象とした人頭税制度なるものを容赦なく施行したのである。このように薩摩の琉球侵略を契機として、八重山は、薩摩→琉球王府→八重山と二重・三重の形で搾取され、差別される悲劇的な歴史を歩んでいくことになるのである。

### 三、人頭税制度

琉球王国は、薩摩の植民地的支配下にあつて、薩摩の強要する税を完納するために、さらに遠隔の地、宮古・八重山を搾取したのである。

琉球王府は、寛永十四年（一六三七）宮古・八重山の人口を調査し、沖縄本島と同様に生産高に割り当てて徴収した「貢租」を、人間の頭数に税を賦課する「人頭税」にかえたのである。さらに琉球王府は数回にわたって人口調査を行い、正徳元年（一七一）には、宮古の責任額、八重山の責任額を定め、人口増減に関係ない税制

度に改定した。これが「定額人頭税」である。

人頭税の納税対象者は、宮古・八重山に居住する十五歳以上五十歳以下の男女で、この納税者を正男正女とし、「正<sup>セイジン</sup>人」と呼んだ。人頭税の納税義務者は、年令によって四階級に分類された。上男女Ⅱ一才〜四〇才、中男女Ⅱ四一才〜四五才、下男女Ⅱ四六才〜五〇才、下下男女Ⅱ五〇才〜二〇才、なお正人であれば不具者・精神異常者でも人頭税をまぬがれることはできなかったといわれる。しかし、それは結局、村全体の責任において処理されたといわれる。滞納者は、いわゆる犯罪人として、理由のいかんを問わず、苛酷な拷問が加えられたのである。竹富島の上<sup>カミセ</sup>勢頭亨氏の蒐集館には、当時拷問に使った道具が現存する。

このように、人頭税制度は八重山の民衆を奴隷化したのである。人頭税制度がいかに苛酷なものであったかは、墮胎、自殺、脱島、間引きなどにまつわる物語りが現存していることからわかる。たとえば、人口淘汰手段として用いた与那国島の人<sup>ビト</sup>樹田<sup>イダ</sup>注(5) クブラバリの伝説注(6) 波照間島の南波照間逃避行という脱島計画などの物語りである。

#### 四、八重山の民謡

八重山の民謡は、「アヨウ」「ジラバ」「ユンタ」と呼ばれる「古謡」と、成立の新しい「節<sup>フシウタ</sup>歌」に大別される。

「アヨウ」「ジラバ」「ユンタ」は労働歌であり、この歌謡が八重山における古い形の民謡で、楽器は一切使用しない。これは水田における草取り、畑における穀類の草取りの際、十数人の団体によって謡われたり、また人頭税石の納入のため、或は各家庭において御祝儀や建築工事の際に謡われている。その他飯米を多量に入用とし、「米搗き」と称して、庭に臼を十余台も並べ、男女十数名が米搗き作業をなす場合、或は建築工事の「地搗

き」の場合などに数組の円陣に分れて盛んにユンタ類の古謡が歌われたのである。このように労働の際に頼まれた団体は「結<sup>ユ</sup>ひ」或は「結<sup>ビ</sup>い人」と称された。「結ひ」とは互いに労働を結集して助け合うことである。この結ひ制度は、人頭税時代に出来たといわれる。そして、この結ひ制度は、現在も残っているが、時代の趨勢とともに消えさうとしている。

「節歌」は三味線を伴って謡われる。この節歌は発想的には、八重山独自の民俗と思想を謡いながらも形式的には、八重山が沖繩の支配下となつて以来、沖繩本島の琉歌調に影響されているといわれる。従つて節歌でも古謡的要素を持つものと持たないものが混然一体となっているのである。

「アヨウ」「ユンタ」「ジラバ」は、共同体を媒介とした平民階級の歌であるが、「節歌」は、治者階級のいわゆる土族が当時のようすを歌にしたものである。

八重山民謡はひじょうに数が多くそれを全部理解することは困難なことであるが、私は、人頭税時代における民衆の心中の思い燃えたぎるユンタや民衆の苦しみを描いた歌謡を暫定的に次のように分類し考察した。

### (一) 徴庸に関する歌

これは民衆が土地を与えられ、貢租や上木税<sup>ウワギ</sup>（物産税）<sup>注(7)</sup>を納めあげる際に強制的に支配者の監督の下で夫役として労働に従事する様子や女性の負担であつた貢布織立などを上納する時の情況を歌いあげているものなどである。これに関する歌として、布晒<sup>ヌサシ</sup>節とアシヤギ節をあげることができると思う。

#### △布晒節

一、天加那志<sup>テンカサシ</sup>御用ヌ、二十<sup>ハタミ</sup>年ヌ美布

二、今日ヌユカル日ニ、勢頭舟子揃ルティ

- 三、拝ミヨタル美布、勢頭舟子揃ルテイ
- 四、今日ヌユカル日ニ、洗濯ユシビラ
- 五、繰り返シガイシ、手ナミシチミリバ
- 六、布艶シチュラサ、長巾ンウチャテ
- 七、今日ヌユカル日ニ、上ギテイシイデイラ

訳

- 一、琉球王への御公用の極最上の美布は、
- 二、今日のよき日に主任と補佐役が揃って、
- 三、織り上げた美布は、主任と補佐役が揃って、
- 四、今日のよき日に洗濯をしましょう。
- 五、繰り返して洗い清めてみたら、
- 六、布の色艶も美しく、長さともぴったり、
- 七、今日のよき日に収納して光栄に浴しましょう。

△アシャギ節

- 一、アシャギ屋ヌ、ナレヤ、二十舛ヌ御用布夜ヤ屋ナシヨテ、スラナナユミ。
- 二、布清ラサ、シヨイテ、綾美ラサ、スリバ心安タトウ、上ギテイ、シイデイラ。
- 三、油断スナ、女童、ウルサスナ、ユナグ、働ラチュナカドウ、果報ヤ、チチニル。

訳

一、村番所内の離れ屋の目的は、最上の御用布を織るために建ててある。昼夜兼行で織に努力しなければなら  
ない。



二、御用布を品よく美しく織って、縞柄も見本通りにしたら安心して、上納ができ、国王の御恵みに浴しまし  
よう。

三、油断するな乙女らよ、粗相な織り方をするな女たち、精神を込めて織る中に、よき果報はくるのだ。

「アシヤギ屋」とは掘って立て小屋の意味である。これらの歌は、人頭税時代に婦女子達の様子を表わしている。  
当時、御用布を織る際に婦女子は厳しい監督のもとにおいて御用布を織ったのである。

## ㊦ 被虐待歌

△トラバラーマより抜粋

原 バヌガ生リヤ、ナユサル生リヤタドウ、朝マタマクヌ哀リバシ

訳 私ら百姓の生立ちは、如何なる宿命であつたればこそ、朝な夕なこの酷使と重税を背負わねばならないの  
か。

原 哀リママ、ヤスマリムヌヤラバ、苦リシャママ失シラリムヌヤラバ

訳 この搾取と弾圧のまま靈界で安住されるものならば、この酷使と重税のままこの娑婆から消え失せられる  
ものならば、消え失せたいものだ。

これらの歌には民衆の苦しみが最もよく表現されていると思う。被虐待歌の存在は、八重山の歴史過程に  
おいて過酷な支配政策の存在を証明するものである。さらに、当時の社会が如何に下層階級にとって冷酷であつ  
たかがわかる。ここに存在するのは、まさに民衆の苦しみと、どうにもならない運命であり、八重山の民衆は、  
貢税収納はおろか、自己の生存すら維持できぬ程、収奪され、苦しめられたのであると思う。これらの歌には民  
衆の悲痛な叫びをよみとることができる。

(三) 女性の性的被抑圧の歌

人頭税時代の女性に関するこの種の歌謡は、無慈悲、さんざんたる現実を種々な角度から歌いこんでいる。それらの大半は、平民女性が支配者階層の男性の自由な存在としてあったことを示していると思う。

内容的には、ほとんどが士族と平民女性の、性を介在とする、夜のたわむれか、あるいは平民女性の悲哀、苦しみなどである。

人頭税時代には賄<sup>マカナイ</sup>女<sup>フ</sup>という習俗があった。これは、役人の現地妻のことであるが、当時はこの賄女になる

ことは名譽なこととして歓迎されたのである。これはやはり、人頭税というものの苛酷さを背景において考えなければならぬ。なぜなら賄女になると、その両親、兄弟が減税になるのであった。当時の役人は、美しい女を見ると、それがたとえ子持ちであろうと、強制的に賄女としたといわれる。この種の歌は数多いが、代表的なものとして、「仲節ヌベーマ節」、慶田盛ぬクンチェーマウンタ、「猫<sup>マヤ</sup>ウンタ」をあげることができると思う。

△猫ウンタ（大意）

「から岳の後に、大岳の側に猫が子を産んだ、五つの子を産んだ、七つの子を産んだ、五つの子に乳をしほられ、七つの子にしほられ、あまりにもだし（栄養物）が欲しくて、大千潮に干上がったので、大千潮に走り下り、ぎしく真地（地名）を歩きまわり、夫婦蛸を見つけとり、人間の兄さんに見つけられ、芭蕉の網で縛られ、大きな家の下に連れて行かれ、大黒柱につながれて、米の飯を食べさせられたが、魚の汁を食べさせられたが、五つの子のことを思うと、七つの子のことを思うと喉がとおらない。」

この歌では自分を猫にたとえて直接口に出して表わせない賄女の苦しみを訴えているのであると思う。このように擬人法をもちいて社会の厳しさ、民衆の苦しみをうたったものも多い。

#### (四) 強制移民に関する歌

ちなみに強制移民政策を説明する。

この政策は、十八世紀前半尚敬王の時代に設置されたもので、その目的は、王府財源を豊かにするために、八重山に新村を創設して水田開拓を促進し耕作地を拡大し、もって米穀増産を計り人頭税増収、人頭税の完納を實現させることであつた。移民者には特典があり、たとえば、住居・田畑の無償給与、人頭税の限定免税、牛馬などの給与などである。

しかし農民は誰一人として移住しようとしなかつたのである。そこで王府は、権力を発揮し、道切り移民というものを強行したのである。これは部落の道路を境界線としてその区画内の村民が強制移民させられたのである。移住地は、西表島や石垣島の奥地でマラリヤ蚊が生息し、人間の住める所ではなく、その地での開墾はまさに地獄であつたと思われる。そういう状況の中で歌謡が生まれたのである。黒島から石垣島の野底に強制移住させられ、離別させられた恋人の心情を歌いあげた「チンダラ節」、波照間島から西表島の崎山に移住させられた老人の歌「崎山節」をあげることができる。

#### △チンダラ節（大意）

「とばらま」（男への敬称）と私は幼な馴染みだつた。「かぬしやま」（女への愛称）と自分とは幼な友達でした。黒島に居つた時は、先島にいた時は、同じ島であつたので、里は一つであつたので、芋を漬むにも我ら二人、磯へ下りるにも我ら二人。私は別れたくないのに、私は離れたくないのに、貴方とどこまでも一緒にと思ふたら、私と一緒にと思ふたら、王府から御命令があつた。島を分れ組を離れて移住せよとの仰せであつた。青空に輝く「ウヤキ星」でさえも夫婦は定められ、七夕祭りの夜は逢うと（牽牛星と織女星の意）聞いているのに、私と貴方は生木を裂くように別られこの方いいこう逢えないとは、ああ世の中はかくも冷酷であるのか。

これらの歌は、恋人との離別、島を離れる嘆きなどを赤裸に描いている。

## 結びと今後の課題

八重山の民衆が過酷な支配政策の中で搾取・差別され続けながら、その抵抗をなぜ行動にあらわしえなかったのか、このことは百姓一揆がなかったことも関連する。

この差別政策について考えてみると、私は、ある特定の地域と地域が差別―被差別の関係にある場合の根本原因は、各地域の集団と集団の意識体の相違によるものであり、その違いは、歴史の発展段階に規定されていると思う。そしてこの様な意識のずれは地理的諸条件に左右されるのだと思う。換言すれば、第一次的には歴史的意識、第二次的には地理的辺境意識が差別を生む原因になるのだと思う。たとえば、薩摩と琉球、琉球と八重山という関係をみてみると、琉球は薩摩よりおくれた、八重山は琉球よりおくれた歴史意識を有していると考えられる。つまり八重山の歴史の発展過程の後進性、同時に社会構造の後進性が八重山をして一歩進んだ琉球、更にはより以上に進んだ薩摩に対し対等にあらしめなかったのである。

八重山の民衆が過酷な支配政策の中で苦しみを歌にしながらもそれを行動にあらわしえなかったのはそういう諸々の後進性に起因すると考えられる。

相対的に少くともこれまでの沖縄人の劣等感意識は、沖縄社会が後進的であったということにあっただろう。この劣等感をなくすためには日本本土に同化することであったといえる。日本人が自国の文化を劣るものとして西欧化したことと同様である。

沖縄人は、沖縄が疎外され、差別され、犠牲になったという被害者の観点からのみ捉えるだけでなく、沖縄の歴史変遷を意味づけることが必要だと思う。さらに沖縄固有の文化を劣ったものとしてではなく、再認識するこ

とが必要である。

注(1) 後世における中山の活動の先駆をなした。

注(2) 中山の支配者

注(3) 「八重山ハ洪武年間ヨリ以来、毎歳入貢シ、敢テ絶ザリキ。奈ニセン大浜邑ノ遠弥計赤蜂保武川ハ、心志驕傲ニシテ、老ヲ欺キ幼ヲ侮リ、遂ニ心変謀反ヲ致シ、兩三年間、貢ヲ絶ッテ朝セズ」(鄭秉哲・他纂修『球陽』)

注(4) 「八重山開闢ノ後、人物繁頼セリ。而シテ巢ニ居シ穴ニ処ツテ、未ダ屋廬ヲ製造スルコトヲ知ラズ。且ツ禽獸ヲ逐捕シ以テ食ヲナシ、莫実ヲ拾収シ以テ飯ヲナシテ、未タ烹飪ヲ為スヲ知ラズ。時ニ一神ヲ生ムコトアリ。名ハ伊里幾屋安真理ト曰フ。始メテ人民ニ耕種飲食ヲ教ヘテ、民自ラ之レヲ利ス。以テ神遊ヲナス」(『球陽』)

注(5) 人樹田<sup>ビトマスダ</sup> Ⅱその昔、与那国の住民を水田の中に入れ、はみ出した者は斬り殺して人口調節したという伝承である。すなわち不具・虚弱者・妊婦・産後の婦人等のように力弱く、走れないもの、いわゆる生産能力のない者を淘汰して精銳のみを残して人頭税生産に邁進させたのである。

注(6) 「クブラバリ」Ⅱ久部良割りの意。これも与那国島における人口調節として、久部良村にある岩壁の間がほぼ二メートルぐらいの割れめを妊婦に跳ばせて、跳び越せたら命を助けるという伝説である。注(5)

注(6)・大浜信賢「与那国島の人口淘汰」参考

注(7) 「物産税」(上木税ともいう)Ⅱ八重山の民衆は本租の米・粟・上布のほかに、物産税も賦課された。物産税の品目は、ナマコ・貝柱・トコロテン・カーナ・海人草など合計四十八種、大浜信賢「八重山の人頭税」参考。

参考文献

- |      |     |           |              |         |
|------|-----|-----------|--------------|---------|
| 牧野   | 清   | 『新八重山の歴史』 | 昭和四十七年七月一日   | 城野印刷所   |
| 大浜   | 信賢  | 『八重山の人頭税』 | 一九七一年十一月十五日  | 三一書房    |
| 喜舎場  | 永珣  | 『八重山民謡誌』  | 一九六七年六月三十日   | 沖繩タイムス社 |
| 杉山   | 信夫  | 『沖繩の民謡』   | 一九七四年十二月二十五日 | 新日本出版社  |
| 浦原   | 啓作  | 『八重山ユンタ集』 | 昭和四十五年九月三十日  | 音楽之友社   |
| 宮城   | 文   | 『八重山生活誌』  | 昭和四十七年十一月三日  | 城野印刷所   |
| 宮良   | 高弘  | 『波照間島民俗誌』 | 昭和四十七年六月二十五日 | 木耳社     |
| 琉球   | 政府  | 『八重山要覧』   | 一九七一年        |         |
| 鄭    | 他纂修 |           |              |         |
| 桑江克英 | 訳註  | 『球陽』      | 一九七一年七月十五日   | 三一書房    |